

未来の教会史 3

ジェイコブ・プラッシュ

エリヤ 昔と今

これについては説明できることがたくさんありますが、次のように説明しましょう。私たちはまずエリヤについて理解しなければなりません。

アハブ王はぶどう畑を欲しがりました—反キリストはダニエル書で美しい地に入りました—しかし、アハブは簡単にはそのぶどう畑を取り上げられませんでした。そこで女王イザベルは彼のためにぶどう畑を我が物としようとしてしました。このことにより、エリヤフー・ハナヴィー (*Eliyahu HaNabi*)、つまり預言者エリヤとの争いに入ったのです。終わりの日に反キリストはそのぶどう畑を欲しがり、偽りの宗教体制を用いてそれを奪い取ります。このためにアハブはエリヤとの争いに陥ったのです。エリヤ、エリシャ、サムエル、またバプテスマのヨハネはすべてつながりがあります。ミドラッシュ的に、教会が思い付きもしない方法でそれらはつながりを持ちます。教会はギリシア的思考でユダヤ的な本を読んでいます。聖書中のどこでも、同じ地理的な場所で起こったことはミドラッシュ的につながりがあります。バプテスマのヨハネの奉仕はどこで行われたのでしょうか？エリコの平原です。ここはエリヤの奉仕が終わり、エリシャの奉仕が始まったのと同じ場所です。サムエルは最後のさばきつかさでしたが、最初の預言者でした。バプテスマのヨハネは旧約における最後の人物でしたが、新約における最初の人物でした。使徒たちがユダの代わりを探しているとき、彼らは最初からイエスと共にいた者ではなく、ヨハネの奉仕の頃から共にいた者を探していました（使徒 1 章 21 節–22 節）。ヨハネは重要人物であり、過渡期にいた人物です。新約の時代はヨハネから始まりました。イエスからではありません。

バプテスマのヨハネとサムエルは誕生の際、同じような状況に置かれていました。人が奇跡的な状況で誕生するなら、そこには必ずミドラッシュ的なつながりがあります。エリヤとエリシャ、ヨハネは同じ霊を持っていました。そのように、邪悪な女が王をエリヤに敵対させました。同じことがヘロデヤとヘロデとに起こりました。邪悪な女が王をバプテスマのヨハネに敵対させたのです。これはパターンです。同じことが繰り返し、繰り返し起こります。両者に起こったことはエリヤに対して起こったことであり、それが終わりにも再びやって来ます。これについては語るものがたくさんありますが、とても複雑なもので

す。

アモス 8 章 11 節を見てみましょう

『見よ。その日が来る。——神である主の御告げ——その日、わたしは、この地にききんを送る。パンのききんではない。水に渴くのもない。実に、主のことばを聞くことのききんである。』

物質的なことが霊的なことを反映していることを思い出してください。神殿の幕が裂かれた時、物質的な出来事は霊的な出来事を反映していました。イエスは終わりの日に飢饉がやって来ると言われましたが（マタイ 24 章 7 節）、物質的な飢饉はただ霊的な飢饉の写しにすぎません。バプテスマのヨハネがエリヤの霊をもってやって来たとき、イスラエルには 4 百年間預言者がおらず、彼は飢饉の中にいる神の民を養い、メシアの到来に民を備えたのです。

終わりの時代には飢饉がやって来ます。しかしなんらかの形で神の民はエリヤの霊にあって、養われ、メシアの到来に備えられます。エリヤが雨を止めた方法は、この世で聖霊の降り注ぎが無くなり、聖霊が取り去られることと同じです。しかしエリヤは異邦人の女を超自然的に養いました。彼女は教会の象徴であり、シェバの女王など聖書に登場する多くの異邦人の女と同じです。シェバの女王はソロモンの知恵を聞くためにやって来たといエスが言われたのを覚えているでしょうか（マタイ 12 章 42 節）。

神の民はその飢饉の時代に養われます。ユダヤのカレンダーには雨が降り注ぐ時期と、収穫期があります。ユダヤ人が黙示録 10 章と 11 章を読んだなら、それをヨシュア記のミドラッシュだと呼ぶことでしょう。そこには同じ数字のパターンがあるからです。黙示録では七つの封印があり、七つ目の封印から七つのラッパが出てきます。数の集合です。それらのラッパは角笛を吹き鳴らす祭りと関連していて、それは最後のラッパ、またヨム・キプールに吹かれるラッパと関連しています——今これに立ち入ることはできませんが、これらのものはすべて一致します。ともあれ、七つある中の七つ目に七の集合があります。そしてその後黙示録には天に半時間ばかり静けさがあつたとあります。（私にとって、この節は聖書の中で最も複雑な箇所です——人の時間の数え方をどのように永遠に適用できるでしょうか。私はこの節を理解できていません）その次にゼカリヤ書で語られているふたりの証人が登場します。最後のラッパが吹き鳴らされると、『この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった』と本文は語っています。

ここでエリコの占領時に起こったことを見ていきましょう。彼らは町の周りを七度回り、

七日間そうしました。しかし七日目になると彼らは町の周りを七度回らなければなりませんでした。そうです。黙示録に書かれている同じ数のパターンがそこで登場します。ヨシュア記でエリコに遣わされたふたりの密偵は、裁きが下される前に異邦人の女、ラハブを救い出しに行きました。このふたりは黙示録に出てくるふたりの証人を予め示していたのです。黙示録はミドラッシュを用いてヨシュア記の記述を再現しています。ですが私の知る限り、このような解説をどの注解書にも見つけることはできません。なぜならギリシア的思考を持っている人たちがそれらすべてを書いているからです。

モーセは出エジプトに備えてイスラエルの子らを養いました。ヨセフは飢きんの期間その全世界を養いましたが、モーセはエジプトを去るようにとイスラエルを養ったのです。これはもちろん、復活・携挙の象徴です。最初の過越では暗やみがあり、ユダヤ人たちだけが過越の食事を食べるために家の中に灯りがありました。イエスがご自分の最期に直面されたとき、ご自分の弟子たちに起こることのために彼らを養いました。使徒 20 章ではパウロが彼の最期を覚悟してそこを去る前、上の部屋に行き、パンを裂き、弟子たちを養いました。使徒 20 章にはその部屋には多くのともしびがあったと書かれてあります。目は体のともしびです。聖書にはもし目が健全なら、体もまた健全だと書かれてあります（マタイ 6 章 22 節）。ゼパニヤ 1 章にはユダヤ人が過越の際に行う“ベディカット・ハメツ (*Bedichat Chametz*)”が暗に示されてありますが、その時期にはそれぞれの家にパン種が無いか、住んでいる人たちが探し回ります。

『その時、わたしは、ともしびをかざして、エルサレムを捜し、...と心の中で言っている者どもを罰する。』（ゼパニヤ 1 章 12 節）

パン種は聖書の中で罪の象徴です（1 コリント 5 章 6 節－8 節）。ユダヤ人は過越の食事を食べる前に、家の中からすべてのパン種を除き去ってしまわなくてははいけませんでした。それは私たちが主の食卓にあずかる前に人生の中からパン種を除き去るべきであるのと同じことです。もう一度言いますが、昔のブレザレンは主の聖餐について、他のクリスチャンよりも多くのユダヤ的理解を有していました。

『わたしは、ともしびをかざして、エルサレムを捜し』

終わりの日のイエスが戻って来られる前、正しい教えによってシオンからパン種が除き去られます。

『からだのあかりは目です。』（マタイ 6 章 22 節）

イザヤ書から引用されたエペソ 6 章の武具のことを考えてみてください。それはナホム書とイザヤ 52 章で語られています

『良い知らせを伝える者の足は、山々の上にあって、なんと美しいことよ。』（イザヤ 52 章 7 節）

エペソ 6 章は次のように忠告しています

『足には平和の福音の備えをはきなさい。』（エペソ 6 章 15 節）

教会はひとつの体です。その足は伝道者です。一方、からだの明かりは目です。これは教師について語っていて、教師とは見て、光（理解）を与える者です。なんらかの形で、エリヤの奉仕は終わりの日において教師のともしびに油を入れることになるでしょう。イエスは使徒たちを養いその後パンを裂き、5 千人を養い、人々を 50 人に分けて養いました。50 とは聖霊の数、ペンテコステです。エリヤはオバデヤを通して預言者の子らを 50 人ずつに分けて養いました。その食物はひとつの源から来ましたが、裂かれ、多くの集団に与えられました。私はこれを完全には理解しきっていませんが、これはパターンであり、どのようにしてか再びそのように繰り返されます。

エリヤは終わりの日に他の教師たちを養うようになります——エリヤが誰であれ、皆さんがどう理解しているか分かりませんが。その“エリヤ”がひとりの人物であれ、ひとつの運動であれ、ふたりの人であれ、他のものであったとしても私はここで深入りはしません。私は一旦確実に理解したこと、またどのような意味で、どのような機能があるか聖霊が完全に示してくれたことしか教えません。ヤコブは『多くの者が教師になってはいけません。』（ヤコブ 3 章 1 節）と語りました。神はあなたがた教師でない人たちよりも、私に多くの責任を追及されます。それゆえ、神が私に見せてくださったと確信を持つまで、私は何事も教理的に教えることはしません。

ダニエル 11 章に登場するマカベア家はこの点でエリヤに似ています

『民の中の思慮深い人たちは、多くの人を悟らせる。』（ダニエル 11 章 33 節）

箴言の中で、邪悪な女が両刃の剣のような真理を持ち（箴言 5 章 4 節）、油よりもなめらかだと言われています。これが欺きの本質です。もし人が神の知恵に欠けているなら、欺きに対して無防備になります。私たちが両刃の剣よりもするどいものを持っているため、彼らも似たものを持っています。私たちが注ぎの油を持つがゆえに、彼らも油よりもなめらか

なものを持ちます。それらが良いわけではありません。しかし偽造されるのです。ダイヤモンドに関しても、もしその人が専門的な鑑定能力を持っていなければ、本物と偽造された物の違いを言い当てることはできません。磨かれたガラスや価値の無いものから出来た偽のダイヤモンドでもとてもよく本物に見え、宝石商しか偽物だと分からない場合があります。複製品でもとても優れた品質の偽のダイヤモンドなどは、専門家でさえ最初は見極めるのが難しく、あらゆる種類の焼灼（しょうしゃく）検査を行わなければなりません。同じように、今日のクリスチャンたちが明らかに間違っただけのものにはまり込んでいるなら——マタイ 24 章は終わりの日についての箇所ではないと言っているリック・ゴドウィン (*Rick Godwin*) らに騙されているなら——**説得力のある嘘**に直面した時にどうなるのでしょうか？ 乾いた地で立つことができないなら、ヨルダンの密林においてどうやって持ち堪えられるのでしょうか？（エレミヤ 12 章 5 節）また人々が「名を挙げて要求しなさい」などのくだらないものに騙されているなら、**本当の欺き**が来たときにどうなってしまうのでしょうか？

終わりの日の教会は、数多くのことのために分裂が起こることになります。そのひとつの要素は妥協する教会と、妥協しない教会の分裂です。もうひとつ教会を分裂させることになるものは、イスラエルへの神の役割とその召しです。三つ目は、聖書の権威と、聖書を解釈する方法です。他の事柄もあるでしょうが、この三つの問題のために教会が分裂することになります。エリヤに対して起こったことはこの患難について教えています。

ノアの日のように

終わりの日を示すもうひとつの聖書箇所は『ちょうどノアの日のようだ』（マタイ 24 章 37 節）と言われた箇所です。ペテロの手紙では、ノアの直面した問題がひとつの観点から書かれています。ノアは義なる教師で人々に警告をしましたが、もう手遅れになるまで人々は聞き従いませんでした。これがノアの未信者に向けたメッセージです。それは第二ペテロ 3 章 9 節から 10 節にあります。

『主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるわけではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。』

これを皆さんがどう解釈するか分かりませんが、アインシュタインとオッペンハイマーが発見するまで、誰も原子が分裂する際に爆発的なエネルギーを得るという意味での亜原子

粒子のことを知りませんでした。素粒子物理学などが知られるずっと以前、原子が分裂すると誰も考えもしなかった昔から、このガラリヤ出身の漁師は原子を分裂させることが可能であると語っただけではなく、それによって全世界を崩壊させるだけの爆発的なエネルギーを得ることが可能だと書いたのです。これがギリシア語においてまさにこの箇所です。

ここでペテロは未信者に向けてのノアの日の警告を語っています。彼らはもう手遅れになるまで聞こうとせず、救われていない人たちは手遅れになるまで私たちの言うことを聞こうとしません。船は教会の象徴です。ノアの箱舟はその寸法によっても何らかのことを意味しています。とはいえ、これは未信者への警告です。彼らが耳を傾けなかったのは、自分たちの罪や不品行で満たされていたからであり、ただ残りの者たちだけが守られるのです。

しかしながら、イエスはマタイ 24 章でノアの日のようになるともう一つの側面から警告されました。

『人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。洪水前の日々は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついでりしていました。そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。』（マタイ 24 章 37 節－39 節）

飲んだり、食べたり、めとったり、とついでりすることです！未信者は不品行について警告を受ける必要がありましたが、クリスチャンは一時的なものに夢中になることについて警告を受けなければなりません。

飲んだり、食べたり、めとったり、とついでりすることに何ら悪い点はありません。しかしながら、終わりの日におけるクリスチャンに対しての危険性は、それらがクリスチャン生活の最大の関心事となり、信者がそれに熱中してしまうということです。次のことを覚えておくのはとても重要です。この世にあるもののために私たちは存在しているのではないということです。結婚したり、レストランに行ったりすることに本質的に悪いことはありませんが、それらのものがある人の生活の中心になってしまうと、その人は問題を抱えています。そのような人はイエスの再臨に準備ができていないのです。

それだけではなく、奉仕が偶像となってしまう危険性もあります。神の国を建てる代わりに自分たちの帝国を築いてしまうのです。

『畑にいる者は...』

—宣教の畑にいる者は—

『...着物を取りに戻ってはいけません。』（マタイ 24 章 18 節）

イエスは『あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう』と言われました（マタイ 4 章 19 節）。

考えてみてください。弟子たちは夜通し漁をしていましたが、イエスから網を投げる場所を教えてもらうまで何も獲れませんでした（ヨハネ 21 章 3 節-6 節）。漁をすることは伝道の象徴であり、そのように物事は起こります。イエスが彼らの漁を導かれた時、彼らは他の船を呼んで、助けに来てもらわなくてはなりません。イエスさまが私たちの伝道を導かれるとき、同じ奇跡が起こります。ひとつの教会でリバイバルが起こると、それは他の教会にも広がります。

ヨハネ 21 章で漁をしている時、ペテロは主が待っているということを知り、非常に変わったことをしました。たいていの場合、泳ごうとしたなら、シャツを脱いで水に飛び込むでしょう。しかしペテロは自分の上着を着ました。なぜなら彼の上着はイザヤ書や黙示録にあるように救いの衣の象徴だったからです。ヨハネ 21 章 7 節で、「主です」という声があったから彼はすぐさま船から飛び込みました。その時、ペテロは漁をしていたのであって、象徴的に自分の奉仕に精を出していました。しかしイエスが来られるとすぐさま自分の奉仕を忘れました。イエスさまが来たからです。終わりの日には奉仕でさえ偶像になってしまう危険が真にあります。イエスさまがいつも第一優先でなければなりません。私はもっと多くのクリスチャンがこれを考えてくれることを望みます。私自身もよくこれを考える必要があります。

どれくらいの時間が残されているか？

アメリカのバスケットボールを考えてみてください。そこにはほぼ超人的な能力でバスケットボールをこなすアフリカ系アメリカ人選手がいます—彼らの能力は驚くべきものです。彼らにとっては試合の時間があと 2 時間残されていようと、30 秒であろうと関係がありません。試合にたった 10 秒しか残されていないとしても彼らはものすごいエネルギーや活力、集中をもってこなします。彼らはその時間で勝負を変えられると考えているからです。試合に 1 時間残っていたとしても同じことでしょう。しかし試合終了のブザーが鳴る

と同時に、激しいプレーは終わります。私たちもそうであるべきです。私たちも今行っていることに完全に集中すべきです。イエスキリストが戻って来るまでにあと 3 日であろうと、300 年であろうと関係がありません。私たちは彼らと同じように、変わらない集中力、活力、激しきをもってこの試合をこなすべきです。しかし最後のブザーが鳴るとそれで終わります。これが私たちのあるべき姿です。

いつも真夜中の鐘は鳴ろうとしています。ヨハネはその手紙で今が終わりの時だと言いました。ギリシア語で示されているのは時間が凍りついたというものです (1 ヨハネ 2 章 18 節)。イスラエルは諸国民に対しての神の日時計です。なぜ初代のクリスチャンたちは終わりの日だと言ったのでしょうか？これを説明しましょう。

ある日、ハロルドがテレビでラグビーを見ていると、スーザンが言いました。「いつ晩御飯にしたい？」その時、6 時 10 分前だったので「ええっと、あと 10 分たったらにするよ。ラグビーの試合がもう 6 時で終わるんだ」そう言われたのでスーザンは晩御飯を電子レンジに入れて、ボタンを押しました。すると突然、6 時 10 分前にラグビーのグラウンドで負傷者が出て、レフリーは時間を止めました。医療班が出てきて医者無しにはこの選手を動かさないといいました。そして医者が来ると、ある決まった運び方をしなければならないから救急車が必要だと言いました。その負傷者についてどうすることも出来ず、ゲームの残り時間は後回しにされました。ですが、試合にあと何分残っていたのでしょうか？10 分です。10 分前に試合には 10 分残っていましたが、その時点から試合は前に進んでいません。試合の残り時間はいつも 10 分ですが、その負傷した選手が動かされるといつでも時計は再びスタートします。この時が異邦人の時です。これがイスラエルが神の日時計であるという意味です。

ネブカドネザルは聖書の中で多くのことを象徴しています。彼は聖書の中でとても興味深く、複雑な人物です。黙示録に登場する七つの教会は、第一世紀の小アジアに文字通り存在していた七つの教会です。またそれらはいつの時代でも存在する教会の七つの種類、特に黙示録 4 章までの終わりの時代に存在する教会のことです。一方で、私が確信しているのが、それらが教会史の中の重複する期間に関連しているということです。それらギリシア語の教会名はそれぞれ意味を持っています。“エペソ”は“継続しない”、“スミルナ”は“没薬”、“ペルガモ”は“離婚した”、“テアテラ”は“継続するいけにえ”などです (私たちはこのテーマについての詳細な一連の説教を提供しています)。とはいえ、その七つの期間は黙示録 4 章、幻の主要な部分に至るまでに起こっています。ネブカドネザルは切り倒され、彼の周りに鉄の鎖がかけられました。聖書には彼が再び繁栄しないように鉄の鎖がかけられたとありますが、その七つの期間の終わりに鉄の鎖は取り去られ、彼は再び繁栄しました。これは同じことです。私の考える限りでは教会の時代はダニエルの 69 週と 70 週との間に起こり

ました。どのようにかしてルカ 21 章 24 節またローマ 11 章に言われているように異邦人の時は終わりを迎え、その後時計は動き始めます。試合にはいつも 10 分残されているのです。時間は凍りつきました。

従って、いつもこの時が“終わりの日”なのです。ノアの日に関して考えると、私たちは未信者に対して不品行を警告する必要がありますが、自分たちに関してはこの人生に執着してはいけないことを警告されなければなりません。ノアの日について理解するために私たちはノアの物語に戻って、それを読んでいく必要があります。

ネフィリム 昔と今

クリスチャンになったばかりの頃、私はドラッグ文化から救い出されたヒッピーでした。私たちはイエスが次の週にでも戻って来られると思っていたので、一日に 8 時間伝道していました。他に何のすることがあったでしょう。その中で他の惑星に住む神々や、UFO を信じている人たちと多く会いました。

ジミー・カーターがアメリカの大統領になったとき、彼は「ビューローレポート (*The Bureau Report*)」と呼ばれる文書を機密解除しました。それはアメリカ空軍、NASA、中央情報局によってまとめられたものでした。すべてが機密解除されたわけではありませんが、カーター元大統領は大部分を機密解除しました。彼らは宇宙生物学から地球外生命体の証拠を発見しませんでした。多くの人々が超心理学を用いて、地球外のように見える現象を引き起こしていました。これらのことを現実にするカルト信奉者たちさえいました。同じような調査がイギリスでもなされました。ビューローレポートはとても恐ろしい文書です。地球外生命を信じることに科学的な根拠はありませんが、オカルトの中ではきちんと記録された根拠があります。イスラエル人でスプーン曲げを披露しているユリ・ゲラーは、他の惑星の人々が自分をメシアになるよう説得しようとしていると言いました。

墮落した者であるネフィリムは創世記において特異な存在です。彼らはノアの洪水を生き抜いたと思われます。ユダヤ人がカナンの地に来たときに遭遇したネフィリムと、そのネフィリムが同じであったかどうかは、神学者の中でも意見が分かれるところです。誰も核心を握ってはいません。ある人は同じであると言い、またある人は違うと言います。もしそれが同じならば、彼らが何らかの方法で大洪水を生き抜いたということです。ともあれ、彼らは“墮落した者”であり、聖書は彼らが人間の女性と性的に交わったと書いています。

さて、今日流行している“解放のミニストーリー”の大半は聖書的な根拠を持たない、ゴーストバスターズ的な無意味なものです。私は真剣に疑っているのですが、これらの人たち大半

が実際に本当の悪霊につかれている人を前にするとそれを対処できるのでしょうか——これは冗談ではありません。私は、悪霊と性的関係を持っていた黒魔術師から悪霊をかつて追い出したことがあります。

アメリカのテレビで、イギリスにいる魔女のことが放送されていて、彼女は救われた時の証をしていて、悪霊と性的な交わりを持っていたことを話していました。他の人も目撃したようです。この種の行為はノアの日にも存在し、終わりの日にも再び現れます。なんらかの形で、ノアの日のように半分悪魔の人間——事実上の怪物ですが——が再び地上に現れるようになります。私たちはオカルト行為の増加、特にこの種の悪魔崇拝を目撃するようになります。それは人が悪霊たちと関係を持つ段階まで至るのです。このようなことはすでに見られるようになっていますが、将来に増加の一途をたどります。

人は完全に墮落しています。私は大学で科学を専攻したので、科学自体を否定することはありません。しかし、人が墮落しているという事実はそこにあります。したがって、科学自体を否定する気はないのですが、墮落した人の手に科学が渡るとき何が起こるかを私は知っています。遺伝子工学を用いて残虐な行為がなされることは想像に難くありません。人は次第に DNA をクローンし、スターリンを再創造したり、スターリンの家系全体を復元したりすることができるようになります。私が大学で生物学を学んでいたときにはサイエンス・フィクションに思われていたことが今この時代に実現しています。もはや空想ではないのです。

私は次のことを確信しています——これは教理的に語っているのではなく、私の意見ですが——この世は、UFO や地球外生命体などのものが関係する大きな霊的感わしのために備えられています。それらは例えばデヴィッド・ボウイのアルバムやスピルバーグの映画で見られるものです。聖書は“墮落した者たち”について語っています。天から墮ちた者たち、ネフィリムです。この宇宙は洗浄される必要があります。このような地球外の現象は、現在進行している霊的感わしの大きな部分を占めると確信しています。私は遺伝子工学の発達を危惧しています——学問の発達自体ではなく、この種の技術が墮落した人の手に渡ることです。それが、“サイエントロジー”やこれらの種類の団体が実際行っているようなカルトと組み合わせられれば、行く末は恐ろしいものとなります。なんらかの形でノアの日には悪霊たちの肉体的な現われがありました。これはイエスの再臨の前の終わりの日において、なんらかの方法で再び起こることになります。これ以上推測することはしませんが私は物事が進んで行っている方向が分かります。このような世界に対して私たちは子どもを備えなければならないのです。これを考えてみてください。キリスト教系の学校など信じられないでしょう。

ロトの時代 昔と今

スミルナ、エリヤの時代、ノアの時代のそれぞれは、ソドムの罪と同様になんらかの形で患難について教えています。使徒ヤコブが殉教の死を遂げた後、イエスの従兄弟であったシメオンの指導の下、信者たちはエルサレムからペラと呼ばれる場所、ペトラではなく、ペラへと逃れました。信者たちは教会の携挙が紀元 70 年に起こると考えていたのです。ローマ人たちを通り抜け、救い出された時——ヨセフスがこれを記していますが——彼らはイエスはその時到来すると思っていました。これが携挙の主要な予型です。これは終わりに起こることを教えています。周りを囲まれ、神の民が救い出され、破滅が来るというこの考えは非常に重要なものです。これが紀元前 720 年のサマリアの陥落で起こったことであり、またエルサレムの崩壊、紀元 70 年にローマの元で二度目にエルサレムが陥落した時に起こったことです。これは神の民が救い出され、裁きがやって来るということです。

なんらかの形で、ロトの家族を救い出した二人の天使は、エリコでラハブを救い出した二人の斥候、また黙示録での二人の証人と関連があります。彼らは皆なんらかの方法で同じことを教えています。ロトの娘たちはソドムの崩壊をこの世の終わりのように考えていました。ロトの妻が振り返り、ソドムに未練を持っていたことはイエスが警告していたことに似ています——その時が来れば振り返ってはいけません。この世に執着してはいけません。ロトは信仰の弱い信者を象徴しており、彼のためにとりなしの祈りをしていたアブラハムはイエスを象徴しています。塩は腐敗を防ぎます。一旦、塩が腐敗を防がなくなり、光が差さなくなると、神は真にご自分のものである民のために介入され、裁きが下ります。

終わりの日において、本当の信者でさえも多くの問題を抱えるようになります。ロトがその分かりやすい例で、多くの点で信仰の弱い信者を表しています。ある時点まで彼はあのような邪悪な場所で快適に暮らしていました。

イザヤ書 28 章は旧約聖書の中で、終わりの日に関して最も重要な箇所のひとつです。そこでは終わりの時代のメッセージが語られていて、『この啓示を悟らせることは全く恐ろしい』（イザヤ 28 章 19 節）とされています。聖書の深い意味が明らかにされるとき、そこには“恐ろしさ”があるのです。ハバククが未来を見たとき、それがとても恐ろしかったので、神に将来を変えてくれるよう願いました。しかしそうはできないと神は言いました（ハバクク 2 章 1 節）。何かとてつもなく恐ろしいことが起こりますが、神は真にご自分のものである民のために介入されます。

ロトの義理の息子たちのことを思い出してください。警告されたとき、彼らはロトの言葉を真剣には受け取りませんでした。それゆえ彼らは救い出されなかったのです。ロトは逃

げ、彼の娘たち、彼の妻も逃げました。彼の妻は救い出されましたが振り返ってしまいました。イエスは**熱心な**信者たち——イエスの再臨を望み、この世に執着していない者のために戻って来られます。このような人たちが再びソドムから救い出されるのです。

取り返しのつかなくなる時

赤ん坊は神の愛の究極のしるしです。未信者の人でもこれを理解できます。夫婦に初めて赤ん坊ができたとして——起こってはほしくないことですが——その赤ん坊の体調が思わしくなく、死に直面しているとき、赤ん坊が引き替えに生きられるのなら、両親は自分のいのちさえ惜しくないと思うでしょう。神は、ご自身がどれだけ私たちを愛しているかを教えようとして、そのような愛を創造されました。イエスは私たちが生きるためにご自分のいのちをささげました。赤ん坊は両親をひどくイライラさせるかもしれません——夜泣きをしたり、色々なことをするでしょう——ですが、それでも親は「これが私の赤ん坊だ。この子のために死ぬこともできる」と言うのです。神はご自身がどれくらい私たちを愛しているかを教えようとしてこの愛を創造されました。

イスラエルが取り返しのつかなくなった時は、悪霊たちやモレク、他の神々に自分たちの子どもを犠牲にした時です。現代の社会では中絶がなされる理由として医療的なもの——子宮外妊娠や腫瘍、など——すべてを除いたとしても、西洋諸国でなされている中絶のほんのわずかの割合にしかなりません。大半の中絶が非医療的な理由でなされています。言い換えると、社会的または経済的な理由なのです。イエスさまはこれを「マモン（富の神）崇拝」と呼びました。注意してください。医療目的ではない中絶は神学的に、また霊的に悪霊崇拝とつながっています。神はイスラエルをそのために裁かれ、またアメリカとイギリスに対してもこのために裁きを行われます。人がこの神の愛の究極のしるしを悪霊にささげるなら、それが神の忍耐の限界となります。これにはまた戻ってきましょう。

ソドムの罪は同じようなものでした。私たちは人間の性についての神学を理解する必要があります。聖書は、キリストが教会のかしらであるように、夫は妻のかしらだと語っています（エペソ 5 章 23 節）。クリスチャン生活でのセックスは、イエスをご自身の花嫁のところに入り、実り豊かにすることの反映です。これは結婚における性的な愛が、性欲をかき立てるものでないとか、楽しいものではないと言いたいのではなく——それは聖なるものであるということです。創世記では神が共に下ってきて、創造者としての愛をもって、被造物を生み出しました。複数である神は共に下ってきて——ヘブライ語は“エハッド”——“複数からなる一”であり——被造物を創りました。神は私たちを神の御姿に似せて創造されました。したがって、神の愛にあって男性と女性が子を産むとき、

私たちは神の創造を再現しているのです。神は被造物を生み出した方であり、私たちは神の御姿に似せて造られたので、私たちも子を産むように造られています。神が意図した人の性は神格の中の関係、また教会とキリストの関係にさかのぼる深い霊的な重要性を持っています。サタンの明確なしるしは、いつも神と反対のことを試みるということです。神の設計した性的な関係は喜びを受け合い、与え合う関係であり、異性愛のものです。現代世界にはびこる最も大きな二種類の性的倒錯は、疑う余地もなく同性愛とサディズム／マゾヒズムです。神の反対を行うという原則のために、これらのものはどちらも明確なサタンの特徴を有しています。異性愛の代わりに、性はねじ曲げられ同性愛になっています。喜びを与え合い、受け合う代わりに、セックスは痛みを与え、受け合うものとなっています。私は結婚したカップルが積極的なセックスを楽しむのが悪いと言っているのではありません。私は性の倒錯を憂慮しているのです。

ポップシンガーのマドンナがタイムズ紙かニューズウィークマガジンで昔取材を受けていました。私はそれを読んでいました。彼女はセックスについてのビデオを出していて、内容の大半がサディズムとマゾヒズムでした。彼女がこれについて聞かれ、なぜそこに性的魅力を見出すのかと尋ねられると、彼女は自分がローマ・カトリックの家庭で育ったために、厳しい男性の権威に辱められ、罰せられるのが好きだと答えたのです。皆さんがローマ・カトリックをご存じなら、彼女はある点で的を射ています。ローマ・カトリックは十字架の否定を通して、人々の上に罪悪感を植え付けます。十字架が罪悪感を取り去るものであるために、その十字架を取り去り、ミサの教理と共になるとローマ・カトリック教徒たちは深い罪悪感の問題を抱えるのです。多くの場合、ローマ・カトリック教徒が救われると、この罪悪感のコンプレックスから抜け出すには多くの時間がかかります。

私たちの社会には同性愛とサディズム／マゾヒズム両方が増え広がっています。最近ロンドンでは、レズビアン女校長がいる学校が、ロメオとジュリエットを授業の一環で子どもたちに見に行かせるのを拒否しました。それはロメオとジュリエットが「あからさまな異性愛」だったからです。これはソドムの終わりの日を描いています。またイギリスとアメリカの終わりの日も描き出しています。裁きは神の家から始まり、それには“キリスト教系”諸国も含まれています。例を挙げると、ハリウッドやマリブで起こっている地震や山火事、地滑りなどの増加があります。神はイスラエルをこれらのために裁き、西洋諸国もそのために裁かれます。私たちはイスラエルよりひどいことを行ってきたので、イスラエルより罪深いのです。

偽預言者 昔と今

さらに、聖書は「バビロンは倒れた」と語っています（イザヤ 21 章 9 節、エレミヤ 51 章

8 節、51 章 44 節、51 章 49 節、黙示録 14 章 8 節、18 章 2 節)。聖書はエレミヤとイザヤからこのテーマを取り、黙示録で用いています。またそれは神殿が崩壊するというダニエル書のテーマと共にです——マタイ 24 章を見てください。エレミヤやダニエル、イザヤたちはバビロン捕囚に至る前に現われた預言者たちでした。この期間——捕囚に至るまでと捕囚時——にイスラエルに起こったことは、この世の終わりに起こることの象徴です。このために黙示録とマタイ 24 章はこれらのテーマを繰り返し、イスラエルと教会に対して様々な方法で適用しているのです。

エレミヤ 5 章 30 節から 31 節を見てください

『恐怖と、戦慄が、この国のうちにある。預言者は偽りの預言をし、祭司は自分か
つてに治め、わたしの民はそれを愛している。その末には、あなたがたは、どうす
るつもりだ。』

預言者たちは偽って預言をし、指導者たちは自分の権威で人を導き、それを神の民は愛して
いました。現代のひとつの例は、ジョン・ウィンバーとポール・ケインが主の御名によ
って偽って預言した後に、それを信じた同じ人たちが再び彼らを見にバスに乗って行っ
た事実です。エレミヤは彼らの国に下る神の裁きを警告していました。同じ 5 章の 27 節
を見てください。

『彼らの家は欺きでいっぱいだ。だから、彼らは偉い者となって富む』

彼らはラオデキヤのように、物質的に富んでいるために神から祝福され、神の好意を得て
いると考え、裁きがすぐそこに迫っていると認めたくはありませんでした。それがラオデ
キヤの教会です。エレミヤは真実を語っていました——「神の裁きが来る。悔い改めなけれ
ばならない」ですが彼らは「いいえ、私たちは富んでいて、神は私たちに金持ちになっ
てほしいんだ」と言います。エレミヤは裁きを警告していたのに、人々は否定していました。
私たちは同じことを現代の「繁栄の信仰」を教える説教者たちや再建主義者たちのうち
に見ます。「預言者は偽りの預言をし、...わたしの民はそれを愛している」気付いてほしいの
が、彼らのことを「わたしの民」でないと**言っていない**ということです。

エレミヤ 28 章を見てください。ハナヌヤはカンザスシティのにせ預言者たちのように、
起こりもしない大それた予測を立てました。15 節ではこう言われています

『そこで預言者エレミヤは、預言者ハナヌヤに言った。』

—彼が預言者でなかったとは言われていません—

『「ハナヌヤ。聞きなさい。主はあなたを遣わされなかった。あなたはこの民を偽りに拠り頼ませた。それゆえ、主はこう仰せられる。『見よ。わたしはあなたを地の面から追い出す。ことし、あなたは死ぬ。主への反逆をそそのかしたからだ。』』』（エレミヤ 28 章 15 節－16 節）

ウィンバーよ、あなたは神の民を偽りに拠り頼ませた。ボブ・ジョーンズよ、あなたは神の民を偽りに拠り頼ませた。ポール・ケインよ、あなたは神の民を偽りに拠り頼ませた。彼らは実際そうしたのです。これは事実であり—彼らのビデオや本を読むと、彼らが同じことを行ったことを確かめられます。これが当時起こったことであり、イエスはご自身の再臨の前にこのようなことが起こると言い、現在まさに同じことが起こっています。このような人たちはグノーシス主義であり、エキュメニズム的です。「ローマ・カトリック教徒のまま死者に祈ってもよろしいですよ。神はそれを忌むべきことだと呼んでいます、何ら問題はありません」と彼らは教えます。バビロン捕囚に至るまで、また捕囚時に起こったことは終わりの日の教会に起こることの主要な象徴です。またソドムとゴモラ、アハブとイゼベルに対峙したエリヤの生涯、スミルナの教会の時代、ノアの日、イスラエルとサマリアの終わりの日々にも同じことが言えます。そして、バビロン捕囚以前に神の裁きを引き起こしたのは子どもを悪霊にささげる行為であり、医療目的でない中絶は神の裁きを西洋にもたらす要因になると私は確信を持っています。

同じように、イスラエルの社会がバビロン捕囚以前に秩序を無くし、神の差し迫った裁きの特徴があらゆるところに現われたとき、人々は「私たちは富んでいる。神は私たちに金持ちになってほしい。私たちは勝利を得る。王様の子どもたちだ。エレミヤ、あんたは偽預言者だ」と言っていました。これは今日も同じです。神の来るべき裁きの特徴があらゆるところに現われ、社会は秩序を無くしています。しかし、人は神が私たちに富ませようとしているだとか、私たちは王様の子どもだ、勝ち誇る教会だと吹聴して回っています。そうです。これがイエスがマタイ 24 章で繰り返し警告していたこと、教会を欺く偽預言者のことです。

リック・ジョイナーは『収穫 (*The Harvest*)』という本を書き、共産主義の繁栄を実際に予測し、それが発展途上国全体を飲み込み、アメリカの一部にまで広がり、西洋の主要な他の場所にも及ぶと語りました。しかしながら、それとまさに正反対のことが起こりました。それでも人々はこの男や彼と似たような人たちが真実の預言者であるかのように従っていくのです。「預言者は偽りの預言をし...わたしの民はそれを愛している」

用語が再定義される時

列王記や歴代誌、またエレミヤやイザヤ——捕囚に至るまでの過程を読むとき、私たちは終わりの時代について読んでいます。箴言 5 章 10 節を覚えているでしょうか、

『そうでないと、他国人があなたの富で満たされ、あなたの労苦の実は見知らぬ者の家に渡るだろう。』（箴言 5 章 10 節）

ヒゼキヤ王は自分の富をバビロンの王に見せてしまいました(2列王記 20 章 12 節–18 節)。終わりの日には、バビロン、偽りの宗教制度の繁栄が起こります。彼らは主の宮の宝を欲しがります。福音派たちがエキュメニカルになるとき——ジョン・ウィンバーやジョージ・ケアリーなど——彼らは私たちの宝をバビロンの王に見せ、バビロンの王はそれを奪い取るようになります。バビロン捕囚以前に起きたこと、またそれを引き起こしたこと——子どもをささげること、バビロンの王に私たちの宝を見せること、真実の預言者に聞き従わず偽預言者たちに従っていくこと、神が私たちを富ませたいと思っていると考え自分たちが富んでいるため大丈夫だと思うようになること——これらと同じことが終わりの日に先立って起こるようになります。

このグノーシス主義すべて、またその他の誤りはどれもエリート主義、簡単に言うと、霊的な高慢に基づいています。これに注意してください。私は最近、ロジャー・フォスター (*Roger Foster* イギリスで始まった信者の行進運動の創始者のひとり) から手紙を受け取りました。私が彼に対して靈魂消滅説が間違っていると言ったことが気に入らなかったようです。彼は永遠の地獄は無いと主張していたので、私は地獄に関して「永遠に」続くと使われているギリシア語を見せ、その同じ言葉が神の栄光またイエスの大祭司職、私たちの救いに関して使われていることを示しました。それゆえ、もし地獄での苦しみが永遠のものでなければ、神の栄光も、イエスの大祭司職も、私たちの救いも永遠のものでなくなるのです。未信者の人たちに悔い改めてイエスの元に来なければ、死んだ時に存在は消えてしまうと言ったなら、彼らは「だから何なんだ？おれたちもそう信じているじゃないか」と言われるでしょう。残念ながらこれがマーチ・フォー・ジーザス (*March for Jesus*) の背後にある神学なのです。それがグラハム・ケンドリック (*Graham Kendrick*) とロジャー・フォスターの信じていることです。人々はそれに気付いていません。私はクリスチャンが共に立ちあがってイエスの御名を宣言し、福音を宣べ伝えることに賛成です。ですが支配主義神学では空に向かって宣言することが伝道と置き換えられています。グラハム・ケンドリックはととても才能に恵まれたミュージシャンであり、讚美歌作者です。おそらくチャールズ・ウェスレー以来の逸材だと人々は言います。しかしながら、彼の曲のすべてにはこの支配主義——「私たちは宣言する、私たちは公表する、勝利を収めている」などの

考えが含まれています。本当の問題は次のものです。グノーシス主義を対処するとき、その支持者たちは私たちと同じ用語をいつも用いていますが、その用語に違う意味を持たせているということなのです。これを説明しましょう。

ローマ・カトリックの神学者とプロテスタントの神学者が神学フォーラムでエキュメニカルの対話をしたとしましょう。プロテスタント側は「私たちは恵みによって救われた」と言い、イエズス会側は同意して「そうです、私たちは恵みによって救われました」と言うでしょう。どちらも意見を同じくし、宗教改革が間違いであったかのようです。しかしながら、“恵み”を意味するヘブライ語は“ケセッド (*chesed*) ”であり、それは契約の中にある神の慈しみです。ギリシア語では“カリス (*charis*) ”であり、“賜物”を意味します。英語の意味は“受けるに値しない好意”であり、ラテン語の“グラジア (*grazia*) ”から来ました。したがって私たちが“恵み”のことを話すとき、このようなことを私たちは考えるのです。しかしながら、ローマ・カトリック教徒にとって恵みとは、祭司による秘蹟によって得られる何かこの世のものではない物質なのです。それゆえ、両者とも「私たちは恵みによって救われた」と同意することができますが、“恵み”という言葉によって、二つの全く違うことを意味しているのです。

ニューエイジ運動に関わっている人に証をする時、あなたは「私は光を見た」と言うかもしれません。そう言うのは、ヨハネ 1 章に書いてあるこの世に来た真実の光のことを考えているからです。ですが彼らも答えてこう言うでしょう。「私も光を見ました」。ただ彼らは「宇宙意識を悟ること」について語っているのです。どちらの人もそれぞれの証をするときに、光を見たと言うことはできますが、どちらも“光”という言葉の定義によって二つの違うことを意味しているのです。

同様に再建主義者たちが“勝利”や“御国”、“征服”、“支配”、“宣言”などの言葉を使うとき、彼らは私たちが使っているのと違う意味を持たせています。このような人たちはちょうどローマ・カトリック教徒や、ニューエイジ信奉者のように、聖書的な用語を非聖書的な方法で用いるのです。実際ローマ・カトリック、再建主義、グノーシス主義はすべて同じ場所から発生しました。それはアレキサンドリアです。それらはみなアレキサンドリア神学に根を下ろしています。

神殿 昔と今

私たちは神殿についての考えをここで話す必要があります。イエスはこの世の終わりについて話す際、マタイ 24 章で紀元 70 年の神殿崩壊について話し始めました。イエスは『この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう』（ヨハネ 2 章 19 節）と言

われました。彼はそこでご自分の体について話しておられたのです。

人は神の御姿に似せて造られています。私たちは神殿のようです。コリント人への手紙でパウロは「あなたがたは聖霊の宮であることを知らないのですか」と言いました。神殿は箱の中に箱があり、またその中に箱があるというものです。外庭があり、そして聖所、またコデシュ・コデシム (*Qodesh Qodeshim*) すなわち至聖所があります。外庭は私たちの物質的な体と関連しています。聖所は私たちの思考や感情、知性を象徴しています。私たちのたましいです。至聖所は私たちの内に神の霊が宿るところに関連しています。これを理解するとクリスチャンから悪霊を追い出すといわれる多くの混乱状態が分かり、それを撲滅できます。しかし、クリスチャンであつても悪霊の影響下に置かれる可能性はあり、圧迫されることや、体や、時にはたましいまで侵入されることがあるでしょう。しかし悪霊に“憑かれる”ということは、内なる人の中に悪霊が入ることを指しており、その場所はクリスチャンにとって神の霊が宿る所なのです。これはあり得ません。イエスに従っているクリスチャンが悪霊に憑かれることはあり得ません。ギリシア語の“エクバルロー (*ekballo*) ”という言葉は“投げ出す”という非常に強い意味を持つ言葉です。私たちはそこから“バリスティック (弾道学)”という言葉を得ています。そのギリシア語は聖書中のどこにおいてもクリスチャンとの関わりで使われることは一度もありません。

イエスをご自分の体のことを神殿と呼ばれました。覚えているでしょうか。イエスの最期の日々に起こったことは初代教会にも起こり、そして使徒たちの終わりの日々にも起こったということ。これらのことは終わりの日の教会に何が起こるかということと共に教えています。再びヨハネ 2 章 19 節を見てみると、イエスは言われました

『この神殿をこわしてみなさい。わたしは、...それを建てよう』

物質的な神殿はイエスの体の象徴でした。ヘブライ語でホセアのことは“ホシェア (*Hoshea*) ”と呼ばれます。この“シェ (*sh*) ”の音はヘブライ語の構造のためにイエスとのつながりを示しています。ヘブライ語は語根に基づいています。あるふたつの違った言葉でも同じ語根があれば、ふたつの言葉はたいてい互いに何らかの神学的つながりを持っています。ミドラッシュでは同じ語根、ショーレーシュを持つ言葉はその解釈において、たいてい確立したミドラッシュ的なつながりがあります。ホセアのその“シェ”という語根は“救い”を意味しています。イエスの名前はイエシュアでした。イザヤの名前はイシャヤフーであり、ヨシュアの名前はイエホシュアでした。その“シェ”の音があればいつでも救いと関連した意味があり、その“シェ”の音を持った人物はすべてイエスについて何らかの方法で教えています。

ホセア 6 章 2 節を見てみましょう

『主は二日の後、私たちを生き返らせ、三日目に私たちを立ち上がらせる。私たちは、御前に生きるのだ。』

ここで分かることがあります。イエスに起こることは私たちにも起こるのです。新約聖書は七箇所で教会が“神殿”または“幕屋”だと言っています。聖霊はレンガを接着させるセメントのようなものです。第一ペテロ 2 章 5 節には

『あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、』

とあります。教会は聖なる宮、神殿であり、私たちがそれを構成する石です。ヘブライ語で“交わり”は“ヒートハブルット (*hitchabrut*) ”といます。ペテロの書簡はユダヤ人に対して書かれ、彼の奉仕はガラテヤの手紙で言われているように、主にユダヤ人に対してでした。それゆえ彼はとてもユダヤ的な視点から手紙を書きました。ユダヤ的な“交わり”の考え方は“ヒートハブルット”、つまり“組み合わせられたレンガ”なのです。教会に来るということはひとつのことですが、交わりに入るのは別のことです。誰でもその建物に入ることができますが、壁の中のレンガとなることは全く違ったことです。私たちの壁にひとつのレンガが欠けていたなら、その建物には何か問題があります。もしあるクリスチャンが教会に組み合わせられていなければ、何か教会に問題があるのです。彼や彼女は組み合わせられるべきです。私たちはその石だからです。

ミドラッシュ的にシュロの主日には何が起こったのでしょうか？ルカ 19 章 37 節から 40 節には次のようにあります。イエスさまが神殿の丘に来たとき、人々は詩編 118 編からのハレル・ラバーを歌っていました——「ダビデの子にホサナ！」そこでパリサイ人は驚いて、静まらせるように言いました。しかしイエスは『もしこの人たちが黙れば、石が叫びます』と言い、神殿のヘロデによって据えられた石を指し示しました。言い換えると、「ユダヤ人がわたしをメシアだと宣言しなければ、クリスチャンが宣言する」ということなのです。パリサイ人とユダヤ人指導者たちは、自分たちがアブラハムの子孫だということで特別だと考えていました。しかし荒野にいるバプテスマのヨハネのもとに行くと、ヨハネは『神は、こんな石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことができになる』（ルカ 3 章 8 節）と言ったのです。何らかの形で、イエスの体に起こったことは紀元 70 年の神殿の崩壊の際に繰り返されました。使徒 15 章ではダビデの幕屋が教会として建て直されるとアモスから引用されています。これは私たちにも起こることです。神殿は再び崩壊しますが、栄光のうちによみがえります。

初代教会は神殿のすぐ外にあるソロモンの廊で会合していました。神が古い神殿を壊そうとしているまさにその時に、すぐ隣に新しい神殿を造り始めていたのです。新しい神殿の準備が出来ると古い神殿は取り壊されました。これは私たちも同じことです。神は新しい神殿、新しい幕屋を建てようとされています。

エルサレムにあるその古い神殿は崩壊して、紀元 70 年の帝政ローマの侵入と共にその場所に荒らす憎むべきものが据えられました。それは神の宮に対する政治的支配を象徴していました。エラストゥス主義 (*Erastianism*)、または国家的教会に注意してください。その考えは全くもって危険なものです。イエスが『カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい』(マタイ 22 章 21 節)と言われたとき、三つの問題を扱っておられました。最初の問題は、旧約のユダヤ教の中でも、ある種の国家と教会の分離があったということです。王はダビデの子孫でなければならず、大祭司はアロンの子孫である必要がありました。これはマカベア家時代の後、ハスモン王朝時代のヨハネ・ヒルカヌスの治世(紀元前 134-104)に複雑になってしまいました。この背景からイエスはこのことを扱っていました。

二つの契約間のつながり

二つ目の問題は二つの契約の間にある区別でした。エレミヤ 31 章に言われているように、新しい契約は古いものとは違ったものとなります。

『わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。その契約は、... 彼ら(先祖たち)と結んだ契約のようではない。』(エレミヤ 31 章 31 節-32 節)

彼らは国家的教会を持っていました。エレミヤの時代の民は国家的な契約に属しているため、自分たちは神と正しい関係にあると考えていました。エレミヤは「新しい契約はもはやそのようではなくなる。神はあなたの心にご自分の律法を記される。個人の応答に基づくものとなる」と語りました。バプテスマのヨハネも同じことを語りました。イエスは来て、その国家と教会の関係を取り除きました。神殿は崩壊したのです。

後にパウロはローマ 2 章で「それはもう終わった。新しい契約は古いものとは違ったものになる」と書きました。しかしイエスが取り除くとエレミヤが語ったまさにそのこと、バプテスマのヨハネが予告したまさにそのこと、イエスが死をもって取り除いたまさにそのこと、またイエスによって取り除かれたとパウロが確信していたことをコンスタンティヌス帝は元に戻しました。その後、宗教改革者たちは聖書に戻ることをせず、元に戻してし

まいりました。カトリック系国家教会の代わりに、今度はプロテスタント系国家教会が出来たのです。真の意味で教会を聖書に立ち返らせるために必要なことは、初めに国家と教会の非聖書的な婚姻関係を崩すことでした。第二のことはアウグスティヌスの「目に見える教会と目に見えない教会 (*The Visible and Invisible Church*)」という偽りの教理を取り除くことでした。なぜならそれは教会が信者と未信者で構成されると教えていたからです。このような人たちはこれを取り除くことに失敗したので、本質的に古い契約の元に戻ってしまいました。

覚えておいてほしいのが、サタンは教会を異教化する前にユダヤ教化したということです。ローマ・カトリック主義とプロテスタント主義はどちらもユダヤ教化されています。彼らはエラストゥス主義、国家的宗教に戻り、どちらも数世紀にわたって相容れない信者たちを迫害しました。反キリストは最終的にそのように教会と国家を結婚させます。これがイエスキリストが三つ目に警告していたことです。国家宗教は完全に非聖書的なものです。事実、本当の終末論が暗示していることを理解するなら、それは忌むべきものです。イギリスはジェームズ王（キングジェームズ）のような同性愛の王をいただき、今はニューエイジの国王が王座につこうとしています。その王たちすべてが本来キリストに冠せられるべき——“教会のかしら”という称号を付けています。

使徒の働きを読むとき、それはただ単に過去の歴史を読んでいるのではありません。私たちは未来の歴史をも読んでいます。エレミヤやイザヤ、バビロン捕囚時の王たち、また捕囚に至るまでのことを読むとき、私たちは過去の歴史と共に未来の歴史をも読んでいます。同じことがダニエル書やダニエルが予告したマカベア家の歴史、ソドムとゴモラ、ノアの日についても言えます。イザヤ書には神は『終わりの事を初めから告げ』ているとあるのです（イザヤ 46 章 10 節）。

船の象徴

今、最終的な描写を見ます。再び言いますが、これは象徴です。私はこれを教理の基礎としているのではなく、真理を説明するものとして用いています。マルコ 4 章と 6 章では船が波に飲まれそうになる記事を読みます。これは患難の中にある教会の象徴です。地はイスラエルと関連していて、海は国々と関連しています——「なぜ国々は騒ぎ立つのか」などの箇所です。とはいえ、最終的な船は使徒 27 章に見られるものです。そこでパウロはマタイ 24 章 45 節で時に従って食べ物を与える忠実なしもべのように、また世界中を養ったヨセフのように、出エジプトに備えるためイスラエルの子らを養ったモーセのように振る舞っています。この象徴を見てみましょう。使徒 27 章 1 節から

『さて、私たちが船でイタリヤへ行くことが決まったとき、パウロと、ほかの数人の囚人は、ユリアスという親衛隊の百人隊長に引き渡された。』（使徒 27 章 1 節）

思い出してください。パウロはカイザルの前に立たなければなりません。カイザルは反キリストの象徴です。2 節、3 節

『私たちは、アジアの沿岸の各地に寄港して行くアドラミテオの船に乗り込んで出帆した。テサロニケのマケドニヤ人アリストアルコも同行した。翌日、シドンに入港した。ユリアスはパウロを親切に取り扱い、友人たちのところへ行って、もてなしを受けることを許した。』（使徒 27 章 2 節-3 節）

（つながりが理解できるなら）ダニエル書にあるように彼らは「小さな助け」を受けました（ダニエル 11 章 34 節）。そして 4 節、

『そこから出帆したが、向かい風なので、キプロスの島陰を航行した。』（使徒 27 章 4 節）

ギリシア語での“風”は“ニューマ (*pneuma*) ”であり、ヘブライ語では“ルアハ (*ruach*) ”です。どちらも“霊”と同じ言葉です。

風には良いものと悪いものがあります。最も悪い風は北東からの風です。地中海に北東からの風が吹くとき、それはガリラヤのカルメル山脈を通り、ガリラヤ湖に吹き下ろし、荒々しい波を引き起こします。カルメル山脈の峡谷はピストン効果を生み出し、ガリラヤ湖に激しい波を作り出します。これがパウロの乗った船が遭遇した風です。ユダヤ人のカレンダーをしてみるなら（それは農耕用のものですが）、雨が降る時期と風がどの方向に吹くかが分かります。歴史の中で大きな影響を持つ霊的な力があつたように、風にも向かい風と良い風があります。しかしながら最後にはその霊的な力はこの上なく敵対するようになります。5 節を続けて読みましょう、

『そしてキリキヤとパンフリヤの沖を航行して、ルキヤのミラに入港した。そこに、イタリヤへ行くアレキサンドリヤの船があつたので、百人隊長は私たちをそれに乗り込ませた。幾日かの間、船の進みはおそく、ようやくのことでクニドの沖に着いたが、風のためにそれ以上進むことができず、サルモネ沖のクレテの島陰を航行し、その岸に沿って進みながら、ようやく、良い港と呼ばれる所に着いた。その近くにラサヤの町があつた。かなりの日数が経過しており、断食の季節もすでに過ぎていたため、もう航海は危険であつたので、パウロは人々に注意して、「皆さん。この航

海では、きっと、積荷や船体だけではなく、私たちの生命にも、危害と大きな損失が及ぶと、私は考えます」と言った。しかし百人隊長は、パウロのことばよりも、航海士や船長のほうを信用した。また、この港が冬を過ごすのに適していなかったため、大多数の者の意見は、ここを出帆して、できれば何とかして、南西と北西とに面しているクレテの港ピニクスまで行って、そこで冬を過ごしたいということになった。おりから、穏やかな南風が吹いて来ると、人々はこの時とばかり錨を上げて、クレテの海岸に沿って航行した。』（使徒 27 章 5 節－13）

パウロは自分たちが困難に突き進んでいることを知っていました。彼はそれをどう避けるかを警告しましたが、大多数は本当に何が起こるかを知っている人に聞き従おうとしませんでした。そして風向きが変わり、状況が良くなったとみえると「ほら、あんなやつに従わなくてよかったじゃないか」という態度を示したのです。

再建主義者たちは鉄のカーテンが崩壊した時、「ほら、ハル・リンゼイはおかしいといったじゃないか。ロシアはイスラエルに侵略なんかしない」と言いました。しかしロシアにおける反ユダヤ主義は当時から高まる一方で、旧ソ連に属していた 4 つのイスラム教国がありますが、少なくともそのひとつが核兵器を備え、イスラム原理主義が隆盛を極めていきます。これは同じことです。『人々が「平和だ。安全だ」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります』（1 テサロニケ 5 章 3 節）

米ブッシュ元大統領は“新世界秩序（*New World Order*）”について語りました。数週間後、彼と英メジャー元首相はペルシア湾岸諸国に数万もの軍隊を投入して、それは第二次世界大戦以来の大きな戦争となったのです。次に彼らはサダム・フセインが新世界秩序の脅威になると考え、彼を取り除こうとしました。しかし彼はまだそこにいます。そして次にユーゴスラビア、中東と続きました。世界のどこにも長く続く平和は無く、特に世界のその特定の地域に平和は存在しません。これはダビデの子、平和の君がユダヤ人とアラブ人に認識されるまで続きます。中東には偽りの平和があります。私はそれがゼカリヤの預言した偽りの平和であるかは確信が無いのですが、もしそうでないとしても、確かにその前触れとなるものでしょう。物事は改善していくように見えます。しかし思い出してください。これはまるで陣痛のようなものです。少しの間痛みはましになるかもしれませんが、子宮収縮は次第に強さを増し、前回よりも激しさを増します。

世のものを取り除く

使徒 27 章 14 節で次に起こることを見てください

『ところが、まもなくユーラクロンという暴風が陸から吹きおろして来て、船はそれに巻き込まれ、風に逆らって進むことができないので、しかたなく吹き流されるままにした。』

教会はその進む方向と目的地を自分の力ではコントロールできませんでした

『しかしクラウドという小さな島の陰に入ったので、ようやくのことで小舟を処置することができた。小舟を船に引き上げ、備え綱で船体を巻いた。また、スルテスの浅瀬に乗り上げるのを恐れて、船具をはずして流れるに任せた。』

彼らは方向を制御することを諦め、ただ船が浮くことだけに気を遣っていました

『私たちは暴風に激しく翻弄されていたので、翌日、人々は積荷を捨て始め、』(使徒 27 章 14 節-18 節)

初代信者たちはこの世のものを捨て去らなければなりません。終わりの日において、私たちは注意深くしていなければ、自分の持っているものに所有されるようになります。私たちに必要な態度は、私たちが持つものすべてはイエスに属しているというものです。もし私がお金持ちであっても、現実には一文無しですが、それは私のものではありません。私はただイエスに属するものの管理人だからです。反対に、もし私が何も持っていない、4年間も無職だとしても、実際私は富んでいます。なぜなら私はキリストとの共同相続人だからです。これ以外の態度は非聖書的で、不健全であり、私たちを問題に突き当らせるものです。彼らは船を救うために積荷を投げ捨て始めました。ブラジルにいるとても貧しいクリスチャンたちは私は知っています。彼らは自分たちの家や車を売って教会を建てます。西洋のクリスチャンはそのような自分たちの積荷を捨て、自分たちの教会を救うためにこの世のものをはぎ取ることを良しとするのでしょうか？そのような人は多くはいないでしょう。

さらに 19 節から見てみると

『三日目には、自分の手で船具までも投げ捨てた。太陽も星も見えない日が幾日も続き、激しい暴風が吹きまくるので、私たちが助かる最後の望みも今や絶たれようとしていた。』(使徒 27 章 19 節)

太陽も星も光を放ちませんでした。イエスはアブラハムに彼の子孫は天の星のようになると言われました。星が光を放たないとき—アブラハムの子孫たちがその光を隠すとき—

イエスの栄光は不明瞭になります。イザヤ 13 章 10 節から 11 節には次のようにあります

『天の星、天のオリオン座は光を放たず、太陽は日の出から暗く、月も光を放たない。わたしは、その悪のために世を罰し、その罪のために悪者を罰する。不遜な者の誇りをやめさせ、横暴な者の高ぶりを低くする。』(イザヤ 13 章 10 節-11 節)

これが使徒 27 章で起こったことです。船は暴風に翻弄されていました。何が起ころうとしているかを知っている人たちは大多数によって無視され、その大多数は真理を知りたがりませんでした。

カリスマ派運動に何がこれから起こるかを知りたいなら、イザヤ 24 章 7 節を読んでください

『新しいぶどう酒は嘆き悲しみ、ぶどうの木はしおれ、心楽しむ者はみな、ため息をつく。陽気なタンバリンの音は終わり、はしゃぐ者の騒ぎもやみ、陽気な立琴の音も終わる。』(イザヤ 24 章 7 節-8 節)

これがカリスマ派運動の終焉です。みことばの真理に基づいている限り、喜びと礼拝には活躍の場があります。一旦自分たちの教理を経験に基づかせてしまったり、聖書以外の基礎を持ってしまうと何も喜ぶことは無くなります。その先には滅びしか期待すべきものはありません。しかしながら、イエスさまは私たちを保とうとされています。

危機における正しい声

使徒 27 章の 21 節から続けると

『だれも長いこと食事をとらなかったが、そのときパウロが彼らの中に立って、こう言った。「皆さん。あなたがたは私の忠告を聞き入れて、クレテを出帆しなかったら、こんな危害や損失をこうむらなくて済んだのです。』(使徒 27 章 21 節)

もし人々が真理を語っている教師に聞き従い、聖書の方法で群れを導いている牧師に従う知恵を持っていたなら、教会に起こっている大半のことは理論上、避けることができたものです。しかし人々は耳をくすぐる者たちに従っていきます。現代、アメリカにいる有名な再建主義者たちや繁栄の説教者たちは大きな教会を持っています。なぜ彼らの教会が大きいかを知っているでしょうか？人々がそこで救われているからではありません——人々はそのような教会で救われたのではないのです。ペンテコステ派教会についていえば、彼

らはデイビッド・ウィルカーソンやニッキー・クルーズ (*Nicky Cruz*) などの伝統的なペンテコステ派の教会で救われています。再建主義者たちや繁栄の説教者らが大きな教会を持っている理由は、繁栄の福音や神の国は今という神学をもって耳をくすぐられた人々を他の教会から引き込んでいるからです。もし、人々が神のことばに従い、その警告に注意していたなら、理論的には教会に来る大半の破滅や裁きを逃れることができたでしょう。22 節を読むと

『しかし、今、お勧めします。元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う者はひとりもありません。失われるのは船だけです。昨夜、私の主で、私の仕えている神の御使いが、私の前に立って、こう言いました。『恐れてはいけません。パウロ。あなたは必ずカイザルの前に立ちます。そして、神はあなたと同船している人々をみな、あなたにお与えになったのです。』』(使徒 27 章 22 節-24 節)

私が確信していることは、イエスの戻って来られる前に悪霊による活動が増えるだけでなく、天使による活動も増えるということです。25 節から

『ですから、皆さん。元気を出しなさい。すべて私に告げられたとおりにすると、私は神によって信じています。』(使徒 27 章 25 節)

パウロの自信と落ち着きとを見てください。ただのいんちきと聖霊が語られた時の油注ぎとの違いは聖霊の声を聞いていたなら分かります。26 節から

『私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます。』十四日目の夜になって、私たちがアドリヤ海を漂っていると、真夜中ごろ、水夫たちは、どこかの陸地に近づいたように感じた。水の深さを測ってみると、四十メートルほどであることがわかった。少し進んでまた測ると、三十メートルほどであった。どこかで暗礁に乗り上げはしないかと心配して、ともから四つの錨を投げおろし、夜の明けるのを待った。』(使徒 27 章 26 節-29 節)

14 という数字は興味深いものです。ユダヤ人の系図は 14 という数字、7 の二倍を重要だと見なしています。彼らは自分たちの意図する議論にとって重要な神学的意味を持つ先祖だけを系図に載せました。例えばイエスの系図では、イエスがメシアだと示そうとするマタイの神学的理論に従って神学的重要性のある人だけが、14 人ごとに載せられています。14 とは次の出来事に移行する中間状態といえます。良い例は何といてもマタイ 1 章 17 節です

『それで、アブラハムからダビデまでの代が全部で十四代、ダビデからバビロン移住までが十四代、バビロン移住からキリストまでが十四代になる。』（マタイ 1 章 17 節）

これが聖書で頻繁に用いられている 14 という数字のひとつの例です。このパターンはパロの幻にも登場します。パロは 7 年間の幻を二度見ます。その収穫と飢きんも終末論に関係しています。

（この聖書の数字学に関してより多くの事柄がありますが、学ぼうとしている量に時間が追いつきません）

試みの時の一致

続けて読んでいきましょう。使徒 27 章の 30 節から

『ところが、水夫たちは船から逃げ出そうとして、へさきから錨を降ろすように見せかけて、小舟を海に降ろしていたので、』（使徒 27 章 30 節）

終わりの日には多くの者が墮落します。背教者について考えてみましょう。ユダの手紙の中では教会の中にいる背教者について書かれています。教会の中には外にいるのと同じくらい多くの背教者がいます。箴言では心の墮落している者は自分の道に甘んじると書いてあります（箴言 14 章 14 節）。背教者たちは離れようとするとき何かを企てます。彼らは教会に来なくなり、交わりに入らず、祈祷会にも来なくなります。そして次々に言い訳を考えるのです。彼らは人を操り、悪巧みを企むようになります。彼らが本当にしていることは、船の“オーナー”から離れ去ってしまったために、船から降りようとするのです。31 節から

『パウロは百人隊長や兵士たちに、「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたも助かりません」と言った。』（使徒 27 章 31 節）

交わりはいつでも重要なものです。第一ペテロの手紙のように、ヘブル人への手紙はとてもユダヤ的な書であり、ユダヤ的な交わりの概念を引き合いに出しています。

『ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。』（ヘブル 10 章 25 節）

もし極めて重要な場所から多くのレンガが外れたならば、その建物の屋根は落ちてしまいます。クリスチャンは一緒になって立つか、ひとりになって立つことができなくなるかのどちらかです。

このことを限定させてください。一致には御霊の一致と人の一致があります。聖霊は真理の霊です。何か嘘の上に聖霊の一致を築くことは出来ません。エキュメニカル運動やインターフェイス運動はこれを試みていますが、嘘の上に一致を建てています。しかしながら、真の御霊の一致はただ真理の上に築かれるものです。エキュメニズムは欺きの上に一致を建てており、彼らはある種の“霊の一致”を持っていますが、問題はどの霊であるかということです。人々が“聖霊の一致”と呼ぶ多くのものは実際、組織的な運営のために神のことばの真理を妥協した人の手による一致です。

養われ、救われる

使徒 27 章 32 節から

『そこで兵士たちは、小舟の綱を断ち切って、そのまま流れ去るのに任せた。ついに夜の明けかけたころ、パウロは、一同に食事をとることを勧めて、こう言った。「あなたがたは待ちに待って、きょうまで何も食わずに過ごして、十四日になります。』
(使徒 27 章 32 節－33 節)

3 年半の期間、エリヤは異邦人の女を養いました。パウロは、モーセやヨセフ、エリヤ、バプテスマのヨハネのように——良い忠実なしもべのように——暗やみと飢きんの時に神の民を養いました。終わりの時に同じことが起こります。良い忠実なしもべは神の民を養うのです。34 節から

『ですから、私はあなたがたに、食事をとることを勧めます。これであなたがたは助かることになるのです。あなたがたの頭から髪一筋も失われることはありません。』(使徒 27 章 34 節)

このような状況で立ち上がるには、本当に神の人でなければなりません。すべての人がもう終わりだと思ふとき、神の力と油注ぎをもって「いやまだ望みがある。イエスは私たちがを愛し、ここから救い出そうとしておられる」と言うことが必要とされます。迫害が来たときに最初に裏切り合い、墮落してしまう者はユダの手紙に描かれているような者です。困難な時が来たとき、繁栄の説教者や彼らに付き従うものは最初に自分の信仰を失います。彼らは十字架に付けられた生活や困難に準備が出来ていないので、困難がやって来るとき

それをどう扱って良いか分からないのです。

35 節から

『こう言って、彼はパンを取り、一同の前で神に感謝をささげてから、それを裂いて食べ始めた。そこで一同も元気づけられ、みなが食事をとった。船にいた私たちは全部で二百七十六人であった。十分食べてから、彼らは麦を海に投げ捨てて、船を軽くした。』（使徒 27 章 35 節－38 節）

『あなたのパンを水の上に投げよ。ずっと後の日になって、あなたはそれを見いだそう。』（伝道者 11 章 1 節）その患難の期間に何らかの形で、御国の福音は荒れ狂う海に宣べ伝えられます。御国の福音は福音とある形で違ったものです。それは同じ福音であり、良い知らせであることに変わりはありませんがその性質において違ったものです。御国の福音はマタイの福音のようなものです。イエスはマタイの福音書で天国について語るよりも、三倍多く地獄のことを語られました。バプテスマのヨハネは御国の福音を宣べ伝え、神がご自身の裁きを下されることを警告しました。使徒 27 章では彼らは自分たちが食べた後に、残りのパンを水に投げました。39 節から

『夜が明けると、どこの陸地かわからないが、砂浜のある入江が目にとまったので、できれば、そこに船を乗り入れようということになった。錨を切って海に捨て、同時にかじ綱を解き、風に前の帆を上げて、砂浜に向かって進んで行った。ところが、潮流の流れ合う浅瀬に乗り上げて、船を座礁させてしまった。へさきはめり込んで動かなくなり、ともは激しい波に打たれて破れ始めた。兵士たちは、囚人たちがだれも泳いで逃げないように、殺してしまおうと相談した。しかし百人隊長は、パウロをあくまでも助けようと思って、その計画を押さえ、泳げる者がまず海に飛び込んで陸に上がるように、それから残りの者は、板切れや、その他の、船にある物につかまって行くように命じた。こうして、彼らはみな、無事に陸に上がった。』（使徒 27 章 39 節－44 節）

ここで船は壊れましたが、その中にいる人々は救われました。ここから私たちが学ぶべきことは、もし私たちが共に立つことが出来ないなら、その時が来たときにひとりで立つことは無理だということです。使徒 28 章 1 節から

『こうして救われてから、私たちは、ここがマルタ [蜂蜜の意] と呼ばれる島であることを知った。島の人々は私たちに非常に親切にしてくれた。おりから雨が降りだして寒かったので、彼らは火をたいて私たちみなをもてなしてくれた。パウロがひとかかえの柴をたばねて火にくべると、熱気のために、一匹のまむしがい出して

来て、彼の手に取りついた。島の人々は、この生き物 [原語では therion=獣] がパウロの手から下がっているのを見て、「この人はきっと人殺しだ。海からはのがれたが、正義の女神はこの人を生かしてはおかないのだ」と互いに話し合った。しかし、パウロは、その生き物 [=獣] を火の中に振り落として、何の害も受けなかった。』(使徒 28 章 1 節-5 節)

黙示録では悪魔である古い蛇は燃える火の中に投げ込まれたとあります (黙示録 19 章 20 節)。これはサタンへの裁きを象徴しています。

ユダヤ的なミドラッシュは一般の教会と違った聖書の読み方をします。それは教会が全体として、根を忘れるというローマ 11 章でパウロが警告した間違いを犯してしまったからです。私たちがその根を見られないのは地面の下にあるからです。しかしながら、もし根がなければ木自体も存在せず、根が枯れていれば木も枯れているのです。終わりの日においてユダヤ人を通して神は教会を祝福されます。私たちはより多くのユダヤ人がイエスに信仰を持つのを見るようになり、神によって自分たちのルーツに目を向けさせられ、聖書の正確な教え方を指し示されます。小さな光があれば普段は十分ですが、より暗くなったときには強い光が必要です。これらのことは終わりの時代まで封じられています。今私たちが終わりの日にいるというしるしのひとつは、聖霊がそれらの封印を解いていることなのです。

船は壊れますが、それに乗っている者は救われます。石は投げ倒されますが、よみがえります。サタンは裁かれるのです。これが将来起こります。次第に使徒 27 章で船に乗っていた人々は、大多数が聞き従わなかったにも関わらず、パウロが初めから真理を語っていたことを気付きました。彼らは身をもって彼が正しいということを知りました。ソドムの民はロトとふたりの御使いの言葉をあざけりましたが、身をもって彼らが正しいことを知りました。ノアの日の人々はノアをおかしいと思っていましたが、彼らも余裕が無くなってから彼が正しいと知りました。

多くの者を悟らせる

ダニエル 11 章では民の中の思慮深い人たちは、多くの人を悟らせるとあります (ダニエル 11 章 33 節)。もし私が何をしてもよいのなら、私は決して聖書を教えることはしなかったでしょう。私はむしろ伝道をしたいのです—私は人々が救われるのを見たいので、そのためにこのことをすぐに譲りたいほどです。私が教えている唯一の理由は十分な数の人がこれが神の望んでいることだと私に語り、彼らが正しいと私は思っているからです。もし終わりの日に備えるために神の民を養うことが私の召しならば、私はそれをしましょう。

賢いおとめと愚かなおとめがいましたが、愚かなおとめはともしびの中に油を持っておらず、賢いおとめたちが正しかったと分かると、それを買おうとしました。しかしながら、マタイ 25 章で見られるように、その時はもう過ぎていたのです。夜が来た時にすでにともしびの中に油を用意しておく必要があります。私が見たいと願っていることは皆さんがともしびの中に油を備えられることです。なぜならそれが必要になるからです。私は皆さんが自分の倉庫に穀物を貯えていることを望みます。それが必要になるからです。

しかし、この穀物を貯え、ともしびの油を買う時、事実直面し、預言が目の前で成就していることを見ているこの時、私たちはノアの日やエレミヤの日、ソドムの日、エルサレムの終わりの日と同じ状況を抱えています。過去起こったことは今にも起こります。事実それはすでに現在起こっています。

分裂がキリストのからだに來ようとしています。そして少なくとも三つのことがそれを引き起こします。もう一度言います。妥協する者と妥協しない者たちです。多くの福音派たちが妥協してしまっています。バプテスト派やペンテコステ派、カリスマ派の中での分裂はすでに來ています。第二にイスラエルとその預言の中での役割です。この問題に関する教会の分裂も來ようとしており、実際すでに來ています。第三に分裂は神のことばの權威と神のことばが解釈される方法に関してやっけて來ます。これが現在起こっていることです。

誰も間違えないようにしてください——イエスは來ます。穀物を得、油を買う時は今です。そうするなら、あなたは賢いおとめとなります。もしそうしないなら、愚かなおとめとなります。イエスはそれを今得てほしいのです。彼はここにおられて、あなたにそれを渡そうとされています。どうぞ、それを受け取ってください。††